

モダン・タイムス・イン・パリ 1925

—機械時代のアートとデザイン

ポーラ美術館(箱根・仙石原) 23. 12. 16~24. 05. 19

本展覧会は、1920~1930年代のパリを中心に、ヨーロッパ、アメリカ、日本における**機械と人間の関係をめぐる様相**を紹介している。特に、「パリ現代産業装飾芸術国際博覧会（アール・デコ博）」が開催された1925年には、変容する価値観の分水嶺となり、工業生産品と調和する幾何学的な「アール・デコ」様式の流行が絶頂を迎えた。日本では、1923(大正12)年に起きた「関東大震災」以降、東京を中心に急速に「モダン」な都市へと再構築が進むなど、世界は戦間期における繁栄と閉塞を経験し、機械や合理性をめぐる人々の価値観が変化をしてきた。コンピュータやインターネットが高度に発達し、AI(人工知能)が人々の生活を大きく変えようとする現代において、本展覧会はおおよそ100年前の機械と人間との様々な関係性を問いかけている。



フェルナン・レジェ 《鏡を持つ女性》 1920年 油彩/カンヴァス

同館新収蔵コレクションとなった油彩画で、多くの色を使って描かれた幾何学的なかたちが複雑に組み合わさったもので、技術革新や機械文明に対する礼賛にあふれている。

ルネ・ラリック 《桑の実計栓付香水瓶》 1920年

レジェの作品に関連して、同時代にヨーロッパを席卷したアール・デコの装飾様式の手鏡や化粧道具や、ルネ・ラリックのガラス香水瓶の展示もある。

ラウル・デュフィ 《パリ・電気の精》 1937年 油彩/カンヴァス

縦190cm・横50mの巨大な壁画は、屏風のように4枚から構成されていて、青と黄色に大気を色付け、あちこちのパリの名所をバラ色に染めている。